



Data

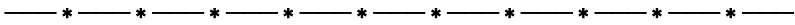
監督・脚本・原案：是枝裕和
 出演：カトリーヌ・ドヌーヴ／ジュリエット・ピノシュ／イーサン・ホーク／リュディヴィーヌ・サニエ／クレモンティーヌ・グルニエ／マノン・クラヴェル／アラン・リポル／クリスチャン・クラエ／ロジェ・ヴァン・オール

👁️👁️ みどころ

是枝裕和監督は、『万引き家族』（18年）でカンヌのパルムドール賞を受賞した直後からアメリカに渡り、イーサン・ホークと出演交渉。そして、前から温めていた「フランスの大女優カトリーヌ・ドヌーヴと一緒に映画を！」の夢を実現させたからすごい。そのテーマを、母と娘の『真実』を巡る物語としたため、娘役でジュリエット・ピノシュまで起用したから、さらにすごい。第76回ベネチア国際映画祭オープニング作品として注目を集め、多くの新聞批評の対象になったのも、当然だ。

証拠に基づく事実の認定。それが弁護士の仕事だが、フランスの大女優は「事実なんて退屈だわ」と平気で言い放つから、アレレ……。大女優を母に持つ娘が“わだかまり”を持つのは、樹木希林の娘・内田也哉子のコラムを読めば明らかだが、本作で娘は母親が書いた「自伝」からどんなインチキ性を発見し、どんな“わだかまり”を増長させていくの？

日本語吹き替え版でファビエンヌ役を演じる女優・宮本信子のコラムのタイトルである「いつでも、だれにも、真実はひとつじゃない」の言葉を噛みしめながら、非常に難解なテーマに切り込んだ本作をしっかり鑑賞したい。



■□ 『万引き家族』に満足せず、是枝監督が新境地に挑戦！ ■□

『誰も知らない』（04年）で、柳楽優弥にカンヌ国際映画祭の最優秀男優賞を受賞させた是枝裕和監督は、その後『そして父になる』（13年）（『シネマ31』39頁）、『海街diary』（15年）（『シネマ35』未掲載）、『三度目の殺人』（17年）（『シネマ40』218頁）で

国内外の賞を次々とゲットし、ついに『万引き家族』（18年）（『シネマ42』10頁）で、第71回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞を受賞するとともに、国内の賞も“総取り”した。

それに続く是枝監督の最新作である『ラ・ヴェリテ（原題）』を撮影しているとのニュースは、2019年4月ごろから報道されていた。2019年5月6日付読売新聞の「文化」欄（文化部・恩田泰子の署名記事）によると、その作品の出発点は、2011年、以前から親交があるピノシュさんと対談し、「何か将来的に一緒に映画を」と意気投合したことらしい。そんな同作が2019年の第76回ベネチア国際映画祭のオープニング作品になったからすごい。

残念ながら2年続けての是枝監督の快挙はならなかったが、注目を集めた同作の新聞批評は多い。その中でも私が注目したのは、2019年10月9日付日経新聞「文化往来」。そこでは、『幻の光』（95年）や『誰も知らない』（04年）などミニシアター作品で国際的評価を得た時期を“第1章”、フジテレビやギャガと組み国内でも大規模に興行した『そして父になる』（13年）からを“第2章”とするなら、本作は“第3章”の幕開けとなる作品だ、と評価している。さあ、そんな是枝監督の新境地への挑戦は？そして、本作は一体どんな映画？

■□■自伝のタイトルは『真実』だが、その実は・・・？■□■

日本の国民的女優・吉永小百合主演の『最高の人生の見つけ方』（19年）の公開とほぼ同時に、フランスの国民的女優・カトリーヌ・ドヌーヴ主演の『真実』が公開されたが、そのタイトルは、彼女が自分自身を演じるかのような本作の主人公ファビエンヌ（カトリーヌ・ドヌーヴ）が出版を控えている自伝のタイトルだ。私たちが弁護士になるについては、民法・商法・刑法等の「実体法」としての法律を学ぶと共に、手続法としての民事訴訟法・刑事訴訟法を学ぶ中で、証拠に基づく事実認定のやり方を徹底的に学んできた。裁判に必要なのは、証拠に基づいて認定した「事実」だが、「事実」と「真実」はどう違うの？

ここではその解説は避けるが、ファビエンヌは娘役で共演する女優マノン（マノン・クラヴェル）と共に映画『母の記憶』を撮影中だから、立派にまだ現役女優だ。70歳を超えてなおパリでそんな活躍を続けているファビエンヌが、テレビ俳優として売れ始めた夫のハンク（イーサン・ホーク）、7歳になる娘のシャルロット（クレモンティーヌ・グルニエ）と共にパリにやってきた、ニューヨークで脚本家をしている娘のリュミール（ジュリエット・ピノシュ）を温かく迎えたのは当然。そう思ったが、アレれ本作では・・・？

孫のシャルロットが「まるでお城のよう」と表現する大邸宅の中で、新作映画についての取材を受けているファビエンヌは、「あれは大した映画がじゃないわよ」と片付けていたし、自伝の出版については事前に原稿を見せる約束をしていたのにそれを破ったと詰め寄るリュミールに対しても、「送ったわよ」と平気で嘘をついていたから、この大女優はかな

りしたか。少なくとも吉永小百合タイプではなく、つい最近亡くなった樹木希林タイプ（？）らしい。しかも、ちょうどその時、出版社から届いた、『真実』と題された自伝本を、リュミールが一晩かかって読んでみると・・・。

■□■この本のどこに真実が？自伝 vs 伝記■□■

リュミール一家をバリのファビエンヌのお屋敷に迎えた1日目は少し不穏な空気（？）があったものの、全体的には歓迎ムードでいっぱいだった。しかし、その翌朝、リュミールは一晩で読み終えた『真実』を持って、明らかに不機嫌な様子でファビエンヌに、「この本のどこに“真実”があるのよ」とかみついたから、ビックリ。是枝監督、フランスを代表するカトリーヌ・ドヌーヴとジュリエット・ピノシュをこんな形で最初からケンカさせて大丈夫なの？

自伝には「昔、小さな娘を学校まで迎えに行った」というくだりがあったが、「そんなこと一度もなかった」というのがリュミエールの主張だ。事実を金科玉条のように大切にする弁護士なら当然これに賛成だが、対するファビエンヌは「事実なんて退屈だわ」と言い放ったから、アレレ。さらに、リュミールは「何で一度もサラおぼさんの名前が出てこないの？」とたたみかけたが、ライバルで親友だったサラの名前を耳にした途端、ファビエンヌは顔を曇らせたから、アレレ・・・。しかし、サラとは一体誰のこと？

大阪の人気歌手でタレントだったやしきたかじんが死亡した後、百田尚樹が書いた『殉愛』が大きな評判を呼んだが、この「かつてない純愛ノンフィクション」はあくまで百田尚樹の視点で書いたやしきたかじんの「伝記」だ。しかし、「自伝」は伝記とは違い、あくまで自分で自分のことを書くものだから、他人が知りえない赤裸々な事実を書いてこそ価値があるもの。一般的にはそう思われているが、さて・・・？

本作のパンフレットには、①女優・宮本信子の「いつでも、だれにも、真実はひとつじゃない」、②小柳帝の「つい見落としてしまいそうな、何気ないショットにこそ宿る『真実』」、③内田也哉子の「母の人生の余韻と共に見た詩情あふれるホームドラマ」という3つのコラムがあり、それぞれ興味深い。とりわけ弁護士である私が強調したいのは、宮本信子のコラムのタイトルどおり「いつでも、だれにも、真実はひとつじゃない」ということだ。小柳帝のコラムでは、同趣旨のことが「近松門左衛門の虚実皮膜論ではないが、『真実』とは、現実と虚構との間の微妙な狭間にあるのではないだろうか。」と書かれている。しかし、ファビエンヌが書いた自伝『真実』の、どこに真実が？

■□■サラって誰？今は亡きサラの存在感に注目！■□■

本作では、フランスを代表するカトリーヌ・ドヌーヴとジュリエット・ピノシュという2大女優の他、オーディションでマノン・ルノワール役を射止めた女優マノン・クラヴェルが、劇中劇『母の記憶に』の主演女優として登場する。ファビエンヌが同作に出演した

のは、マノンが「サラの再来」と言われるほど今は亡き女優サラに似ていたためらしいが、サラって一体誰？

サラはずっとファビエンヌのライバルかつ親友だった女性で、「サラおばさん」と呼んでいたリュミールにとっては、ファビエンヌ以上に母親のような存在だったらしい。したがって、ファビエンヌの『自伝』の中にひと言もサラの名前が出てこないことについて、リュミールが「うしろめたいんだ」と捨て台詞を吐いていたが、ひょっとして、それが真相？ そんな、ちょっとしたいざこざ(?)の中、長年ファビエンヌの秘書を務めていたリュック(アラン・リボル)が「辞める」と宣言し、後任をリュミールに託したが、それはなぜ？ ファビエンヌへの収まらない怒りを自分にぶつけてくるリュミールに対して、「今度の映画も“サラの再来”と評判の新進女優マノンが主演だから引き受けたのだ」と説明したのは、ファビエンヌのすべてを把握しているリュックだが、さてその真相は？

そんなリュックが突然退職を申し出たのは、『真実』の中に一行も自分のことが書かれていなかったためらしい。それによってリュックは自分の「人生を否定された」と考えたわけだ。このように、ファビエンヌの自伝である『真実』は、周囲の人たちにさまざまな波紋を投げかけることに……。もともと、そんなこんなトラブルの中でも、ファビエンヌとマノンが共演している映画『母の記憶に』は、ファビエンヌの新たな秘書リュミールが撮影に付き添う中で順調に進んでいったから、ヤレヤレだ。

このように本作では、スクリーン上には全く登場しない今は亡きサラという女性が、ストーリー進行上大きな役割を果たすので、その存在感に注目！

■□■母娘の対決と和解を2大女優が！■□■

『真実』の出版を巡っては、アメリカからリュミールの家族がやって来ただけでなく、ファビエンヌの元夫でリュミールの父親であるピエール(ロジェ・ヴァン・オール)も登場する。久しぶりに再会した娘に対して、ピエールは「自伝への出演料をもらってもバチは当たらないだろう」と開き直ったが、そこで、すでに『真実』を読み終えているリュミールから「パパはもう死んだことになっている」と教えてもらったピエールが、「そりゃないだろう！」と怒ったのは当然。また、リュミールが結婚相手として選んだ夫ハンク・クーパーは、今でこそ売れ始めているが、サラと並ぶ大女優のファビエンヌに比べれば、テレビ俳優なんて屁みたいなもの。大女優ファビエンヌの娘として生まれ育ったリュミールが、なぜそんな男と知り合って結婚し、パリからアメリカに渡ったの？リュミールがファビエンヌのお城のようなお屋敷ではじめて『真実』を読んだ翌日の、ちょっとした母娘の「言い争い」はささいなものだったのかもしれない。しかし、弁護士私の言わせれば、「事実なんて退屈だわ」と決めつけたうえで、『真実』と題する「自伝」に平気でウソ八百を書き連ねるファビエンヌの姿勢は、やはり問題だ。

他方、久しぶりに再会した母娘の1、2度の会話だけでは、『真実』に込めたことの真の

意味がリュミールに伝わらなかったのも当然。しかし、退職したリュックのかわりにリュミールがずっとファビエンヌの撮影に付き添っていると、強気一辺倒に見えるファビエンヌも時々意外な弱さを見せることも……。母と娘が毎日繰り返すそんな「抗争」を、傍で見守り、場合によれば仲裁役を買って出たのが気の優しいハンクだが、実の母娘の関係には、他人が立ち入れない領域があるのは仕方ない。そして、「サラの再来」と言われるマノンと母親が連日演じている『母の記憶に』を見守っているうち、リュミールの頭の中には『真実』に書かれていなかったエピソードが次々と蘇ってくることに。その1つが、サラの着ていたドレスを、ファビエンヌが今なお大切に保管していたこと。そして、そのドレスをファビエンヌから譲り受けたマノンが着ると、ホントにサラそっくりの姿になったこと、だが、それは一体何を意味しているの？

前述したコラム「母の人生の余韻と共に見た詩情あふれるホームドラマ」を書いた内田也哉子は、言うまでもなく樹木希林と内田裕也の一人娘だが、そこには「ファビエンヌと娘のリュミールが歩み寄るシーンを見て思い出したのですが、私も母に対して、すごくわだかまっていた、自分の中でこだわっていた想いのようなものが、何気ないことで、ふとそのしこりがほどけていったというようなことがありました。」と書いてある。なるほど、女同士の感情は男同士より複雑なことはわかるが、有名女優の母親と、そんな母を持つ娘の間には、それなりの「わだかまり」があって当然かもしれない。

本作では、日本人の是枝監督がフランスの2大女優を起用して、そんな母娘の「わだかまり」を見事に表現している。そんな本作では、導入部での母娘の“対決”と、クライマックスでの2大女優が演じる“和解”の姿をじっくり鑑賞したい。

■真実は1つじゃない！それを本作でじっくりと。■

前述したように、当事者の代理人として裁判に責任を持つ弁護士にとっては、「証拠に基づく事実認定」がすべて。したがって、ファビエンヌのように、「事実なんて屁のつぶれ」と言われたのでは、自分の仕事を否定されたも同然だから、それに同意できないのは当然だ。しかし同時に、前述した宮本信子のコラムのように、「いつでも、だれにも、真実はひとつじゃない」のも事実だ。本作は、是枝監督が、そんなチョー難解な問題をテーマとして、フランスの2大女優を起用した映画だから、奥行きが深いのは当然だ。

本作の新聞批評は多いが、とりわけ私が注目したのは、2019年4月13日付日経新聞の「文化欄」における、カトリーヌ・ドヌーヴと是枝監督との対談。そこでの問題提起は、「俳優の真実とは何だろう？」「芝居とは」というもので、まさに“直球勝負”だが、そこで2人はどう語っているの？この対談における、「題名通り、俳優にとっての『真実』が主題だと思う。でも俳優は演じるのが仕事で、それは嘘をつくことでもある。」との質問に対するカトリーヌ・ドヌーヴの答えは次のとおりだ。すなわち、

「演技は嘘ではない。セリフは自分の言葉ではないし、自分が書いたものでもないけれ

ど、役者はそのテキスト、その言葉に、自分の何かを乗せ、何かを注ぎ込む。フランス語で『芝居をする』と『遊ぶ』という動詞は同じ。まさに演じることは遊ぶこと、遊び心をもつことだと思う。」

また、是枝監督の答えは次のとおりだ。すなわち

「真実と演技を、真実と虚構という形で対立させるのではなくて、真実とマジックというのかな、演技を嘘ではなくてマジックととらえ、重なったり離れたりするものにしようと思った。」

さらに、それを聞いたカトリーヌ・ドヌーヴの最後の答えは次のとおりだ。すなわち、

「作品には必ず説明できないものがある。それをあえて説明する必要はない。謎のままでもいいものは多い。」

なるほど、なるほど。この質問に対する2人のこの答えは、弁護士生活を45年も続け、「証拠に基づく事実の認定」を追求し続けてきた私にとっても非常に興味深いものなので、あえてここで紹介しておきたい。

2019（令和元）年10月21日記